

## 第4回連載 演習

---

連載第4回では、介入効果の検証のために必要な評価設問について解説した。PICOの構成要素を意識しながら、以下の事例において介入によって何を明らかにしたいのかを整理してみよう。

### 演習1

K市では、40～50代の生活習慣の悪化が政策課題となっていた。生活習慣の悪化は現在の医療費の増加をもたらすだけでなく、その世代が今後高齢者になったときに将来の医療費・介護費の増加を引き起こしかねない。

生活習慣の改善策を検討することになったK市の担当者は、生活習慣病の予防にウォーキングが効果的であるという情報を得た。そこで担当者は「1日平均歩数」を改善すべき成果指標として定めた。

次に担当者が考えたのが具体的な政策である。思い至ったのは、スマホアプリを開発し、40～50代に配布することによって、ウォーキングを促す政策である。スマホアプリには万歩計機能が搭載されており、日々の運動状況や健康状態が見える化されるようになっており、それによってウォーキングに対する意識づけを図ろうと考えた。

スマホアプリは利用者数に応じて従量課金される仕組みであるため、一気に全市展開するほどの予算の確保は難しそうであり、まずはこの政策の効果を検証したいと考えた。

### 演習課題1

この政策の効果を検証するための評価設問をPICOの形で整理してみよう。

## 演習 2

政策を検討するなかで、健康改善行動を促すためには行動経済学の知見に基づく「ナッジ」の活用が効果的だという情報を得た。ナッジとは「肘で小突く」というのがもともとの意味だが、転じて「意思決定の自由を尊重しながらより良い選択を促すこと」という意味で使われている。例えば、アプリ利用者に対して、自身の平均歩数を表示するだけでなく、周囲の人の平均歩数も伝えることによって、歩数の少ない人にウォーキングを促すことが期待できるという。

そこで K 市の担当者は、平均歩数ランキングの表示機能をスマホアプリに追加することを思いついた。

### 演習課題 2

この政策の効果を検証するための評価設問を PICO の形で整理してみよう。

## 演習 3

政策を検討するなかで、40～50 代のスマホアプリ活用率は低くなる懸念があり、むしろ科学的なエビデンスに基づいてウォーキングの効用を理解してもらう方が効果的ではないかという意見が寄せられた。

そこで演習 2 のスマホアプリの配付とは別個に、ウォーキングの効用を解説する文書を 40～50 代に送付して平均歩数の増加を促す政策も行うことにした。

### 演習課題 3

この政策の効果を検証するための評価設問を PICO の形で整理してみよう。

## 演習 4

(演習 2 の想定を念頭に置いて下さい)

政策を実施する前に、市内の 40～50 代にアンケートを実施したところ、2 割の人は民間企業が提供している同種のアプリを利用していることが明らかになった。そこで K 市は、政策のターゲットを同種のアプリを利用していない層に絞り込むことにした。

### 演習課題 4

この政策の効果を検証するための評価設問を PICO の形で整理してみよう。